



一人ひとは、かけがえのない存在

開発コンサルタント 辻村 直 さん

清瀬で生まれ育った辻村さんは、現在は東ティモールに在住。学生時代に海外ボランティアで東ティモールへ渡航したのをきっかけに「モノ造りを通して国際貢献」の仕事がされています。これまでの活動や想いを伺いました。

●理工系への進路や、現在の仕事に進まれたきっかけ

幼い頃からモノを作ることが好きでした。好きな科目は、図工。得意科目は理科と数学。好きと得意を考えたら自然の流れで、理工系の育英高等学校（現・サレジオ高専）工業デザイン科へ進みました。

進学当初、高専卒なら大手企業への就職は安泰と言われた時代でしたが、卒業前にバブル崩壊で一変します。先行き見えない大手企業への就職は取りやめ、将来的に伸びると予想されたクロージャー分野の会社に就く。しかし、不景気の波で売上が低迷。8年で会社を辞めました。その時に、「自分の思い描く社会貢献をしたい」と強く思ったのです。その思いが、今の仕事につながりつつあります。

●なぜ、東ティモールへ渡航したのか

自分自身を模索していた学生の頃、海外ボランティアで、東ティモールに渡航するのが最初の出会いです。その頃東ティモールは、電気も水道もまだ普及していませんでした。モノ的には決して豊かではないけれど、幸せに暮らしている人々をみて、価値観が大きく変わったように思います。

清潔な水がないために皮膚病が蔓延し、衛生状況が悪かったことや、戦争や貧困もあり、平均寿命はとも低い状況でした。ボランティア活動では、自分たちが



村を歩き、住民たちと対話を重ね、共同の供水施設を造るための「風車造りのプロジェクト」を立ち上げました。慣れない氣候、言葉は通じず何もできなかったけど、風車造りを通じ、現地の仲間たちと共に一つのモノを造る喜びを感じました。その関わりは今も続いています。

●仕事で大切にされていること

モノ造りを通して、少しでもお役に立ちたい。現地の仲間と共に働くことは、時間がかかるけれども、継続的に関わることを大切にしています。2003年に、漁村生計支援事業の案件で再訪問した際は、住民と3か月衣食住を共にし、シンプルな漁業ボートを製造しました。現地の手法に合った最新の素材を使ったボートが完成した時の喜びはひとしおでした。

●喜びについて

その時に、現地の仲間がかけてくれた「あなたたちの存在がプレゼント。これまで無視され続けてきた東ティモールに日本から来てくれたことが嬉しい」。この言葉に心動かされ、現在があります。



●若い世代へ伝えたいこと

以前、母校で講話する機会をいただきました。その際に、後輩たちへ「一人ひとり、かけがいのない存在で、必ず活躍の場がある」と伝えました。何事も先入観を持たずに、自分自身で確かめて感じて欲しい、と

●今後の活動や想い

年明けから4年がかりで現地の豊かな海で捕れた魚を、子どもたちの学校給食に供給するプロジェクトに携わります。

現地の人は、その日暮らし。必要なモノは、自分で造り、そこにあるモノで豊かに暮らすシンプルな生き方。私もそうありたいと願っています。



（インタビューを終えて）

今なお、東ティモールで活動を続ける辻村さん。穏やかな笑顔からは、海外の第一線で活躍し続ける厳しい状況は想像が付きません。辻村さんのインタビューを通して、異国の地の東ティモールが身近に感じました。いつか、訪れることが出来れば…（インタビュー 川村）

*東ティモール

旧ポルトガル領から第2次世界大戦後インドネシアの一部となったが、言語文化の違いや開発の遅れ等から独立のための30年にもわたる武力闘争の末、2002年にインドネシアから独立した国。

インドネシア・バリ島の東方に位置するティモール島東部の小さな国。国土は約1万4900km²。東京、千葉、埼玉、神奈川の4都県を合わせた大きさで、人口は約118.3万人（2015年、東ティモール財務省国政調査）。カトリック教徒が約90%を占める。

